

# 国際日本学研究科

## 修士学位請求論文要旨

〔論文題名〕

対義語ペア「遠い・近い」の非対称性について

—共起語の分析を中心に—

|                 |                |
|-----------------|----------------|
| 国際日本学研究科 博士前期課程 |                |
| 国際日本学           | 専攻             |
| 日本語学・日本語教育学     | 研究領域           |
| 入学年度            | 2024 年度        |
| 学生番号            | 4911244001     |
| 氏名              | WEN JIAMIN     |
| 指導教員            | 田中 牧郎          |
| 提出日             | 2026 年 1 月 8 日 |

## はじめに

本研究は、「遠い」「近い」という形容詞対義語ペアを研究対象とし、共起語の選択や構文的用法に着目して、用法上に見られる非対称性のあり方を明らかにすることを目的とする。

従来の研究では、大里（1990）、小出（2000）、劉（2018）、栗木（2022）などにより、「深い・浅い」「広い・狭い」「長い・短い」「高い・低い」といった次元形容詞ペアが詳細に分析されてきた。一方で、「遠い・近い」については、体系的な検討が十分に行われているとは言い難い。八亀（2015）や平塚（2013）において、「遠い・近い」の用法上の非対称性に関する指摘はなされているものの、その非対称性が具体的にどのような用法や共起関係において現れるのかについては、なお十分に明らかにされていない。

そこで本研究では、大規模コーパスを用いて多数の用例を分析し、共起語の種類や出現頻度、全体的な共起傾向を明らかにした。さらに、得られた分析結果を、複数の辞書における「遠い」「近い」の意味・用法の記述と比較することにより、両語の用法上の非対称性を多義構造の観点から位置づけ直すことを試みる。

以下では、本論の概要、得られた結論、および今後の課題について述べる。

## 本論の概要

第Ⅰ章では、先行研究を整理した上でその問題点を指摘し、本研究の課題および目的を明確にした。あわせて、研究課題に基づく分析方法を示し、用例の抽出基準および分析手順について述べた。

第Ⅱ章では、「遠い」「近い」と共起する名詞を分析対象とし、両語の名詞共起に見られる相違点について検討した。まず、用例を、「遠い」「近い」が表す意味に基づいて「空間的意味」「時間的意味」「抽象的意味」の三つのカテゴリーに分類し、各意味領域ごとに用例を整理した。次に、各意味領域において両語と共起する名詞について、文脈中で果たす役割に着目し、「属性主」として機能する名詞と、「基準点」として機能する名詞とに区別したうえで、その意味的特徴や傾向を詳細に分類した。さらに、各分類ごとに共起名詞の出現頻度を示し、量的側面からも両語の用法に関する相違点を明らかにした。また、各カテゴリーの考察に際しては、コーパスから抽出した具体的な用例を提示し、それぞれの文脈における解釈を踏まえながら分析を行った。その結果、「遠い」「近い」が共通して用いられる名詞の特徴が確認される一方で、特定の意味領域や文脈においては、いずれか一方に偏って現れる名詞も存在することが明らかとなった。

第Ⅲ章では、「遠い」「近い」と共起する副詞を対象に分析を行った。まず、収集した共起副詞を出現頻度の降順で示し、両語がそれぞれどのような副詞と多く共起するかを確認した。次に、各副詞の比率差を示すことで、共起傾向の相違を明確化した。さらに、共起しやすい副詞の性質をより詳細に捉えるため、山田（1936）に基づいて副詞を「程度副詞」「情態副詞」「陳述副詞」に分類し、分析を行った。とりわけ、本研究で対象とする形容詞は程度副詞との共起頻度が高いことから、程度副詞に焦点を当て、仁田（2002）の分類方法に基づいて「程度副詞」を「純粹程度の副詞」「量程度の副詞」「量の副詞」「概念的・概括的な程度量の副詞」の四つのカテゴリーに細分化し、「遠い」「近い」の共起傾向に見られる相違点を考察した。

第Ⅳ章では、まず、第Ⅱ章および第Ⅲ章の考察を踏まえ、「遠い・近い」に関する用法上の非対称性を総合的にまとめた。本研究の分析結果から、「遠い」「近い」は対義語ペアでありながら、基準点の要否や共起語の分布において体系的な非対称性を示すことが明らかになった。名詞共起の分析によれば、「遠い」は基準点が省略されても自然に解釈さ

れやすい一方、「近い」は「何に対して近いのか」を明確に示す必要があり、特に抽象的意味においては基準点の明示がほぼ必須である。この点から、「遠い」は曖昧性や主観性を許容する語であるのに対し、「近い」は対象間の隔たりを特定・確定する語であると言える。こうした名詞共起の傾向は、副詞共起の分布にも構造的に対応している。「遠い」は、隔たりの程度や変化の幅を調整する副詞と多く共起するのに対し、「近い」は、距離や状態の確定性を補強する副詞や、到達の近接性を明示する副詞との共起が中心となる。以上より、名詞および副詞との共起を通して、「遠い」「近い」は対義語ペアとしての対称性を有しつつも、用法上は一貫した非対称性を示すことが明らかとなった。次に、以上の分析結果を踏まえ、確認した複数の辞書の意味記述と比較しながら、「遠い」「近い」の語彙的性質を多義構造の観点から位置づけ直した。結果的には、「遠い」「近い」は、空間的隔たりを基盤とする対義語ペアでありながら、多義構造および意味拡張の方向性において異なる性質を有する語であることが明らかになった。空間的・時間的意味においては、両語はいずれも「隔たりの大小」を表す点で比較対称的であるのに対し、抽象的意味においては用法上の非対称性が顕著に現れる。「遠い」は、基準や目標との隔たりの大きさを表しつつ、その到達を前提とした接近的な意味を含意し、不確定性や未達成性と結びつきやすい。一方、「近い」は、性質や特徴の類似性を表す用法において、評価性や確定性を伴う傾向が強い。このように、「遠い」「近い」は単なる意味の反転関係にあるのではなく、それぞれが異なる意味的役割を担いながら多義的に拡張している。すなわち、「遠い」は事態の過程を強調する語であり、「近い」は事態の結果を強調する語であることが、本研究により示された。

#### 今後の課題

今後の課題として、第一に、「遠い」「近い」と共起する格助詞の選択と、それが意味解釈や構文制約に及ぼす影響について、十分な検討が残されている点が挙げられる。第二に、本研究で明らかにした用法上の特徴や非対称性を、「深い・浅い」「広い・狭い」など他の次元形容詞対義語ペアと比較することにより、次元形容詞全体の体系的理解を深める必要がある。第三に、「遠い」「近い」に見られる非対称性を日中対照の観点から検討し、とりわけ「接近性」や「評価性」といった意味的性質が中国語においてどのように表現されるかを明らかにすることは、対義語ペアの非対称性をより一般的な観点から捉える上で重要な課題である。